



随 想

Essay

フランス語とフランスの歌に包まれて

French and French Songs Throughout my Teaching Life

戸賀崎博保

Togasaki Hiroyasu

「文は人なり。」は18世紀・フランスの博物学者ビュッフォンの言葉として知られている。文章ばかりでなく実際のところ、あらゆる分野においてこの事が当てはまると思われる。言動や業績は全てその人物を表すのである。

筆者はその事を踏まえて現在フランス語教師を職業とする一方、趣味の域を越えてフランス歌曲とシャンソンを歌い続けている自分自身を振り返ってみようと思いつたのである。

フランス語との出会いは、第二外国語の必修選択科目が起因となる。

ドイツ語かフランス語かの二者択一であった。立教大学経済学部を受験の際、受験票に丸印を付けなければならなかったのである。思えば昭和34年(1959)、18歳の時であった。私は敢えて自分の性格とかけ離れていると思われた、粹^{いき}で開放的なくフランスの方を選択したのであった。

私の少年時代はいじけていて、神経質で、周りの空気に順応出来ず、自分の事だけに気を取られ、社会に対しても自然に対しても関心がなく、毎日の生活をもがきながら、人に遅れる事が唯一の強迫観念という状態で過ぎて行った。

そうした内面とは裏腹に、小学生の頃は空威張りのような強引な発言でクラスの中に座り、中学生の頃は授業中に先生を茶化したり、休み時間に2、3人の友達の前で東映時代劇俳優(市川右太衛門、片岡千恵蔵、月形龍之介、大友柳太郎、中村錦之助)の声帯模写をして喜ばせたり、奇想天外な言葉、例えば「二酸化マレガンのお浸し^{ひた}」と言ってみたり、振った人名^{もじ}、例えばヴェテラン俳優の二本柳寛^{にほんやなぎ かん}を三本柳瓶^{さんほんやなぎ びん}などと言ってを友達を笑わせていたのである。高校生活は男女共学でなかった事が大いに不満で、味気ない3年間を過ごしたと云う思いが60年を過ぎた今となっても強く残っている。石坂洋次郎の『若い人』のような青春ロマンに溢れた高校生活に憧れていたからである。

小学・中学・高校時代をそれなりの内面的な重荷を背負いながら、周囲の波に^{さら}流

れて溺れる事を私は極度に恐れていたのである。政治・経済はもとより歴史にも疎く、科学に至っては全くと言って良いほどに興味を示さない、おどおどした若者が私であった。人に遅れてはならないと努力はするのだが、成果が見えず、鬱々と毎日を送っていたのである。

学校の教科書以外にほとんど何も読まず、音楽と云えば、ラジオから聞こえる童謡か歌謡曲；他に浪曲、落語、漫才ぐらいが私の情操教育を担っていた。

中学生の時、男子生徒が2、3人集まってベートーヴェンの『田園』がどうの、チャイコフスキーの『悲愴』がどうのと話し合っているのを見て、自分の遅れを寂しく意識したものであった。

こんな私が大学の入学試験で経済学部を選択したのは、父親の職業が日本橋富沢町で、従業員10人足らずの織物問屋を営んでいるという単純な理由からであった。本造二階建ての住居を兼ねた店舗の中に、中学卒の“小僧さん”や“女中さん”が何人か住み込みで働いていた。頭の禿げたお爺さんのような人の他に、50歳くらいの“番頭さん”が二人、30過ぎの經理の男性が一人、女子事務員が二人通って来て居て毎日顔を合わせていた。私の家族は当時、両親、弟二人、妹一人が若い従業員等と同じ屋根の下に住んでいた。八つ違いの兄は大阪の呉服問屋で修行をしていた。年に1、2度帰ってきて、特に母親を喜ばせていた。兄は社交的で人懐っこく、中学卒の為、早くから社会の波を体験していた。

私が高校生の頃、家の近くにあった問屋街の居酒屋、2、3キロ離れた銀座の高級中華料理店、5キロ離れた浅草のキャバレーにまで連れて行ってくれたのである。

このような家庭環境だった為、6人兄弟・姉妹（2歳年上の姉は2歳で夭折）の中で大学に進学したのは4人の兄弟の中で私ひとりであった。後に私がフランス語・フランス文学の道に身を置くとは不思議な因縁だったと思わざるを得ない。

中学校の時は3年間野球部に所属し、プロ野球選手になる情熱を燃やし続けていた。一方心が相変わらず不安定で爪をしょっちゅう噛み、勉強に興味が湧かず、嫌々ながら辛うじて各教科に付いて行ったのである。学校放送の番組に関しては、何故か音楽鑑賞と名作ドラマだけが私の心を癒して呉れていたのである。『英語』の授業は二人の男の先生のうち片方の先生に恐怖感を抱いていた。

その先生は小柄で痩せていてメガネをかけていた。しゃがれた高い声でゆっくりと、時折ためいきをついたり、怒ったり、声を出さずに歯を剥き出して笑ったりしながら厳しく、2・3年生の「英文法」を教えていた。その先生の誠実で人懐っこい人柄に私は多少の好意を寄せてはいたのだが、なにしろ当事、私は宿題以外に勉強した事がなかったのので、『英語』も授業中ほとんど何も理解出来なかったのである。

私が通った東京都中央区立の小・中学校には、伝統ある『久松』という名前が付いていた。隅田川がすぐ近くを流れ、小・中学校共に「明治座」まで徒歩10分位の所に

あった。浜町、人形町を控え、漫才・落語の「末広亭」、名前が粋な「甘酒横丁」^{あまざけ}、弁天様で有名な「水天宮」^{すいてんぐう}など東京・下町の風情が漂っていた。夏には両国の花火を居ながらにして観る事が出来た。久松中学校の方は、両国橋と新大橋との間の隅田川沿いに道路を挟んで建っていて、挟いコンクリートの屋上や校庭にも花火^{さしき}敷が臨時に設置されたのである。

この中学校から200メートルほど町寄りに位置する久松小学校に昭和天皇が訪問されたという話を私が小学生の頃聞いた事があった。

私が小学4・5年の頃、アメリカ人の先生方が15・6名ほど訪れ、華やかな服装に身を包み、満面に笑みを湛えながら、挟いコンクリートの校庭でラジオ体操をしているわれわれ児童を観ていたのを思い出す。

70歳近くになった今、心の泉となって湧き出すのは、さまざまな遠足の他に小・中学校の行事として日本橋の「三越劇場」までクラスごとに30分ほど歩いて行って鑑賞した狂言、アンデルセン原作の芝居、さらにはジャズの生演奏である。

中学2年の終わり頃になると、高校受験の空気が私を圧迫し始めて来た。

4当5落という言葉が先生方の口から漏れ、否応なく私も実行に踏み切る事となった。「4当5落」^{よんとう ごらく}とは、睡眠時間4時間で志望校に合格、5時間で不合格というものであった。普通の成績だった私が無防備に無理やりに受験勉強なるものを急激に始めたのである。まるで水泳の初心者が力任せに、フォームなど構わず100メートルを泳ぎ切ろうとするようなものであった。

周りの友達の中には寝不足で顔面蒼白、激瘦^{げきや}せの者が出て来た。「あの位頑張らなくてはいけない！」と私は密かに思い始めた。そして実行に移した結果、寝汗^{ねあせ}をかき、鼻に膿^{うみ}みが溜まるようになり、授業中睡魔に襲われ、大病寸前にまで追い込まれたのであった。さらに悪いことに眠気を覚ます為に市販の覚せい剤^{たいびよう}がいの錠剤を一人で手に入れ、習慣的に飲むようになっていたのである。神経過敏から来る湿疹^{かゆ}の痒みも私の小さな心と体に追い討ちをかけたのである。

この自己流受験勉強は都立高校不合格という結果をもたらした。この間、ただひとつ英語に興味湧き出し、以後人並み以上の努力が続く事となったのである。明治大学附属中野高校に入学が許され、3年間、英語への情熱が絶える事がなかった。

硬式野球部に入部したが、練習場が遠くにあった為、帰宅時間がかかなり遅くなり3日間だけで退部してしまったのである。その後は無所属のまま勉強一筋の学生生活を劣等感と欲求不満^{かか}を抱えながら、規則正しく送る事となった。

大学進学はトコロテン方式に従わず、明治ではなく立教を選んだのである。当時から「英語の立教」という評価が定着していて、漠然と魅せられていたのである。本当は英米文学科に憧れていたのだが、大多数の女子学生の中にいて、自意識過剰で劣等感^{さいいな}に苛まれている自分では、立教ボーイのようなダレディーで爽快な振る舞いは出来

ないという直感が過ぎったのと、家が織物問屋という事で、経済学部が妥当であろうという結論に達したのであった。

第二外国語は『仏語』であった。週二日必修で、一年生の時に「初級文法」と「初級読本」があり、それぞれの先生に風格と個性が感じられた。二年生では同じく週二日必修で、別の二人の先生方の指導の下でそれぞれにモーパッサンの短編とアレドレ・モロワの『パリの女』を勉強した。

その間クラブ活動として「グリークラブ」という合唱のサークルに入部したのであった。最初は「E. S. S.」(English Speaking Society)に入るつもりでいたのが、キャンパスを歩いていた時、女子学生の入部勧誘に遭い、急遽変心してしまったのである。今振り返ってみると、「その時運命の女神が微笑んだ!」と云えるのである。

経済学部・経営学科と云っても、当時は1・2年生の間は一般教養科目で占められていた。「文学」で、芥川龍之介の『鼻』や『羅生門』を読んだり、「哲学」の宿題で、エピクテートの『人生談義』を精読したり、「英語講読」で、バートランド・ラッセルのエッセイ集やオー・ヘンリーの『最後の一葉』、ナサニエル・ホーソンの『大きな石の顔』といった情操教育に相応しい授業に身を置くことが出来たのである。英語担当の先生方もそれぞれに味わいのある風貌をしていらして毎週の授業が楽しみであった。特に『大きな石の顔』の講読を担当された黒田先生の物静かな口調で進められた、美しくも格調高い英語の発音が宝石のような光を放っていた。他に片山先生が担当された「ドイツ文学」でゲーテとシラーという疾風怒濤のロマン主義精神に魅せられた。

しばらくして、専門課程の科目を1・2年生でも学ばせるべきだという社会的な機運が高まって来た。現在ではどこの大学においてもそうした意向を踏まえたカリキュラム編成になっていると思われる。社会に出て即戦力となれるような学生の養成が大学教育の主たる目的となったのである。「現実」が人生目標の根本に据えられたのである。そして当面の生存競争に勝利する事が大多数の人間の最大関心事となったかのような様相を呈しているのである。云うまでもなく誰しも各自の生活に心の「豊かさ・情趣・安らぎ」や美への憧れを秘めているに違いない。大雑把に捉えるならば、人間生活は「科学」と「芸術」との調合で成り立っていると思われるのである。どちらかが多すぎても少なすぎても平穏な心の境地を得ることが出来ない。しかし「完全な心の平静」とは「死」を意味するのかも知れない。生きている以上、老若男女誰もが少ならかの不満を抱えているに違いないのである。

私の大学生活はかくして「一般教養科目」と「グリークラブ (Glee club)」とから始まったのである。一般にグリークラブと云えば男声合唱団を意味するのである。しかし幸運な事に立教大学には「グリークラブ (Glee club)」という名の下に女声合唱団が

共存していて、入部して1年後の昭和35年（1960年）に任意選択の混声合唱も新設される事となったのである。

私は黒の詰め入り学生服にブルーのバッジの付いた学生帽という出で立ちで毎日、真面目に、それこそ遊び心など皆無な状態で「池袋」と（「^{とみざわちやう}富沢町」から家族だけが移転したわが家）、東京都中央区日本橋「^{はまちやう}浜町」とを片道1時間半かけて通学していたのである。

グリークラブの1年生は養成期間中に発声法や簡単な合唱曲を先輩の指導で学ぶ事になっていた。

昭和34年（1959年）当時世の中が合唱ブームの波に乗り、団員の数が増える傾向にあった。立教はそれでも早稲田や慶応に比べればはるかに少なかったけれども、男女あわせて120人位だったと記憶している。

夏休みの合宿は関東甲信越の高原で行われるのだが、男女あわせて120人が同じ屋根の下で1週間ほど過ごすのであるから、生真面目だった私には「^{しふく}至福」どころか「^{くえき}苦役」を実践しに行くと言っても過言ではなかった。

部員は合宿2日前位に池袋の大学に集合し、数曲の楽譜が配布される。ほとんどの楽譜が、わら半紙の上にガリ版で印刷された手書きのもので、数10枚にも及んでいた。

「グリークラブ」の組織は、学生指揮者、キャプテン、内政、渉外、会計などの他に、「楽譜係」と云うのが2、3名いて、「^{げんし}原紙」という^{ろうび}蠟引きの油紙の上に鉄筆で、市販されていないオリジナルの楽譜を1枚50円の^{てあ}手当てで写譜していたのである。実は私も3年生の時にこの役を引き受け、1枚を仕上げるのに6時間もかけていたのである。どんなに速い人でも3時間はかかったと云われていた、割に合わない「内職仕事」のようなものである。不思議な事に、当時私はこの役を全く不満に思わなかったのである。「間に合わせなければ！」という思いが強かったのと、写譜している間、ラジオを聞くのが楽しみだったのである。昭和34年（1959年）の頃は合唱ブームの時代で、「東京混声合唱団」は『東混』の名で、各大都市の合唱団の先端を行き、カルテット（男声四重唱）としては慶応出身の「ダークダックス」が草分けとなり、3、4年後に現れた早稲田出身の「ボニージャックス」が活躍していたのである。他に「デュークエース」、「ロイヤルナイツ」、「フォーコインズ」なども強い持ち味を発揮していた。女声トリオ（三重唱）として「スリーグレイセス」の存在も忘れる事が出来ない。

こうした歌声を聴きながら鉄筆で音符一つ一つを^{きざ}刻み込む作業が私にとって楽しかったし、特権のような意識を持っていたのである。勉強の方は、空いている時間に図書館へ通っていたと記憶している。図書館には新聞コーナーがあり、英字新聞も置かれていた。《The JAPAN TIMES》の他に《STUDENT TIMES》があった。私は何故か英語ばかりの《The JAPAN TIMES》の方に惹かれ、^{おそのり}スポーツ欄・芸能欄・社会面・第一面の政治欄を自転車^{おそのり}遅乗競争のようなペースで辞書を引かずに読んでいた。

「グリークラブ」の合宿は、当時6泊7日であったと記憶している。新しく取り組む曲の譜読みから始まるのだが、何か楽器をやった事のある人はリズム感も良く、楽々と音を取る事が出来る。私のような小・中学校の授業で音楽をやった位の者にはまともについて行けない。幸いなことに人数が多く、先輩達にも取り囲まれているので、不消化ながらも合宿の最後の日までおどおどしながら居座る事になる。練習日の合間に懇親会・フォークダンス・ピクニックなどが組まれていて、正に、若人の『ばら色の人生』が展開されていた。ところが当時の私にはむしろ『棘色の人生』だったのである。男声パートは高音のトップテナーとセカンドテナー、中音のバリトン、そして低音のベースで構成されており、女声パートは高音がソプラノ、中音にメゾ・ソプラノそして低音がアルトとなっている。懇親会ともなると、男女パートの組み合わせで「トップ&ソプラノ会」；「セカンド&メゾ会」；「ベース&アルト会」が開かれるのであるが、男声のバリトンだけがいつも溢れてしまうのである。私はベースのパートに所属していて溢れる悲哀を味わう事がなかったとは云え、そうした懇親会が私を異常に緊張させる事になっていたのである。低い声の女性達には一般に落ち着いた優しい雰囲気があり、控え目な笑顔を見ると、私は狼狽し、幸福感を隠そうとして、自意識過剰となり自己紹介で突拍子もない事を口走ってみたり、とにかく相手との会話がぎこちなく、その場で後悔しながら気まずい思いを繰り返していたのである。それぞれのパート会が室内で和やかに行われている間、旅館の広い庭の片隅でバリトンのパートが男岡士でやけ気味に大声を上げて盛り上がっていた。

練習は通常は午前中に3時間、午後4時間、夕食後のパート練習が2時間というスケジュールで1日9時間やっていたのである。

「宗教曲の立教」の名は当時から定評があった。私が初めて経験した曲は、パレストリナの「聖母マリア被昇天のミサ」と云う大曲であった。

立教大学グリークラブの顧問に、バッハの研究者として高名な(故)辻荘一先生が創立以来50年にも亘って関わり、副部長に中世音楽の権威として名高い、当時30歳代の皆川達夫先生が担当されていた。ヴォイストレーナーには主に現役のオペラ歌手の方を招き、集団で発声法を学んでいた。石井昭彦先生に立教グリーは永年に亘ってお世話になっていた。小柄な体から発せられる張のあるテノールの声は私の度肝を抜き、

「プロの声」と云うものを認識させられた最初の声楽家であった。この合宿に2、3日遅れて参加された。約30名の我がベース(低音男声)パートの先輩の中に色男が何人か居て、夜のパート練習の後に豊富な女性経験を、枕と座布団を使った実演入りで披露したと云う事が、翌朝ある先輩から我々1年生に伝えられた。先輩たちの中には、それが原因で寝不足が祟り、昼間の猛練習に<気>が入らず、早くも二日目から練習を休むグレンディ4年生まで現れて、非難を浴びたのである。途中から参加されたヴォイストレーナーの石井昭彦先生がだらけた練習風景に嫌気がさし、予定よりも早く合

宿を後にされてしまったのである。当時1年生だった私には音符を追うのが精一杯で練習中の雰囲気^{たろ}が弛んでいるという事に全く気が付かなかったのである。

2年生の時の合宿にはヴォイストレーナーとして高田彬生^{あきお}先生が参加された。12月の定期演奏会にピアノ伴奏^{かん}つきの男声合唱曲『枯れ木と太陽の歌』(石井勲作曲)をやる事になっていたのである。男性陣は3名ずつパートに関係なく別の部屋で高田彬生^{あきお}先生から発声^みを診てもらう事になっていた。グリークラブ生活を1年間経験していたとは云え、私は発声法というものを全くと言って良いほどに習得出来ていなかった。高田彬生^{あきお}先生の前で私はおずおずと聞き直ったような気持ちで第一声を発した時、高田彬生^{あきお}先生は驚いたような表情をされて、『お違^やんなさい！ お違^やんなさい！』とおっしゃられた。その時は意味がはっきり解らなかったが、今思い返して見ると、『歌の勉強を続けなさい！』という事だったのである。

バス(低音)歌手の高田彬生^{あきお}先生は『枯れ木と太陽の歌』の出だしのフレーズ「♪枯れ木は独りで唄う♪」を、小さく緊張感を籠めた、くっきりとした声で模範を示された。其の時まで私はフォルテ(強音)を出せる事が最大の目標であると思い込んでいた。後になって、「ピアノ(弱音)で歌う事の出来ない人は本当の歌手ではない。」という事を、名前を思い出せないが、ある世界的な歌手が言ったのを記憶している。そう云えば確かにフィッシャー・ディスカウにしても、マリア・カラスにしても長いフレーズの弱音部が特に異彩を放っているように思えるのである。

4年間のグリークラブ生活の中でフランス音楽に触れたのはたった一回だけであった。確か私が3年生の時だったと思う。その曲とはプーランクの『アッシジの四つの祈りの歌』である。ところが我々はその曲をフランス語ではなく日本語で歌ったのである。約50年も前ではフランス語と云うのは稀有^{けう}な言葉とされ、その発音の仕方が敬遠されていたのである。

今ではどこの大学でも外国語の歌は原語演奏が当たり前になっている。

この『アッシジの四つの祈りの歌』の指揮を執ったのは若杉弘^{ひろし}氏であった。面長で痩せていて小柄な体の前に差し出される細長い指の動きが流麗であった。

今でこそ国際的な指揮者も当時は「名古屋合唱団」の、30歳に満たない温厚なほとんど無名な一青年指揮者であった。このフランスの合唱曲には「フォルテ」(強音)のフレーズが見当たらず、絶えず小声で、柔らかく、レガート(滑らか)に歌わなければならなかったのである。当時の私は、相変わらず「大きな声で歌う」事を目標にしていたので、このプーランクの『アッシジの四つの祈りの歌』の芸術的な価値にも歌詞にも全く無頓着に、「物足りなさ」を秘めながら難しい音程をひたすら追っていただけだったのである。

振り返ってみると私は日本の歌(童謡、歌曲、民謡)以外の外国の歌(宗教曲、歌曲、黒人霊歌、ポピュラーソング、ミュージカル)に関して、歌詞の意味・内容を考

えながら歌った記憶がほとんどないのである。つまり「歌うと云う事は音程^{したが}に導^{したが}って声を出す。」としか認識していなかったのである。

私の大学生活はこのように学業よりも「歌」に重きが置かれていたのである。

音楽大学に入りたくてもピアノが弾けず、楽典の知識もなく、将来の生活設計など眼中になく、これほど^{のんき}暢気な学生は珍しかったに違いない。周りの4年生達が就職活動で目の色を変えているのを見て私にも確かに焦りはあった。1, 2度、就職資料室の中に入って、会社の募集要項を1, 2分、見たけれども、気が乗らず、グリークラブの練習の方に頭が切り替わっていたのであった。

フランス文学科新設のポスターが目に入って来たのはそんな時であった。

かくして1965(昭和40)年に立教大学フランス文学科の3年生に編入学し、さらに^{のぶやすしょういち}修士の称号を得た。その間、将棋部に所属したり、延安^{のぶやすしょういち}正一先生に声楽の個人レッスンを受けたりと、学問よりも趣味の方にかなり気持ちが傾いていた。就職について相変わらず私は何の対策も取っていなかった。グリークラブの同輩たちは、今や社会人となって好景気の中で^{はつらつ}澹^{はつらつ}刺とした姿を同期会の席で見せていた。

修士課程を出た後、職のない私はアルバイトをやる事にした。日本蕎麦屋の出前持ちを約半年、日仏学院で教室の掃除を数ヶ月、どちらが先だったか忘れてしまったが、とにかく一生懸命やった事を今でも誇りに思っている。

父親が情けない私に業を煮やしてか、当時1ドル360円の時代にフランス行きを奨め、渡航費はもとより、1969年2月から2年間の生活費まで負担してくれたのである。

1971年の2月に南フランス・モンペリエ大学・文学部での留学から帰国し、4月から桜美林大学の非常勤講師としてフランス語を教える事になった。その後玉川大学、立教女学院短期大学、実践女子大学の教壇に立ち、現在は実践女子大学の教授として定年を数年後に控えている。

大学に勤め始めると同時に私は世田谷区・^{しんだいた}新代田のアパートで一人暮らしをする事となった。数年して教壇生活に慣れた頃、歌を習いたいと云う情熱が再び湧いて来た。^{のぶやすしょういち}以前習っていた延安^{のぶやすしょういち}正一先生と連絡が取れないので、私は、先ず伴奏ピアニストを探そうと思い付いたのである。井の頭線^{しんだいた}で「新代田」から渋谷方面で一つ目の駅が「^{しも}下北沢」である。私はむしろ反対方向の吉祥寺方面で一つ目の駅、「^{ひがしまつばら}東松原」まで散歩するのを好んでいた。ある時、「^{ひがしまつばら}東松原」駅近くの写真屋のショーウィンドウにピアノ・レッスン募集の小さなポスターが目^とに留まった。『この先生に伴奏をお願いしよう!』と心に決めて会いに行くと、60歳位の婦人が応対してくれ、自分は伴奏はしない、とにかく何でも一流の演奏を聴くと良い、と言った後、すぐ近くで歌をやっている所がある、と教えて呉れたのである。10メートルと離れていない、細い通り道の角に立つその立派な家の広い玄関の中に私はみすばらしい音段着で入って行った。春か

ら初夏にかけての頃だったと思う。半袖シャツに穴の開いた薄汚いズボンを穿いた、
楽譜を持った30男の前に70歳位のお手伝いさんと思われる人が出て来た。10秒位して
から高貴な婦人が上品な服装で立ち現れた。面長で色白、小柄でふっくらした体型、
豊かな髪がアップで纏められ、ワインカラーが基調のドレス、凛とした中に慈愛の
こもった細めの眼差しで私に質問した。「ど経歴は？」（豊かな美声であった。）「大学で
コーラスを4年間やっていました。」「・・・あっそう。・・・家はプロの人しか教え
ないのよ。」

私の脳裏に諦めが過ぎった時、「あなた、それ楽譜ね。ちょっと歌って見て。」私は
吹き抜け天井のサロンに通された。何と先生自らピアノ伴奏をして下さったのである。
私はイタリア古典歌曲の中からDel LEUTO作曲の“Dimmi Amore”《わたしに愛を》を夢中
で歌った。先生は落ち着いた手捌きで弾いて下さった。

「そうね、声が出てないわね。・・・ちょっとお待ちになって。」

1分もしない内に若い色白で丸顔の小柄でふっくらした、目の大きな女性が現れた。
「あなたこの人と発声練習してご覧。」・・・発声練習が始まった。若い女性は伸びや
かに自信に満ちた表情を保ちながら高音になるに従ってヴォリュームを増して行った。
私はと云えば、表情に恐らく輝きも無く、高音になるに従って声が萎んで行ったので
ある。彼女の音域はアルト（女声の低音）で私はバリトン（男声の中音）である。・・・

「あなた、しばらくこの娘に習いなさい。」かくして私はこの女性；高橋典子嬢から
個人レッスンを受ける事になったのである。最初に会った先生は国立音楽大学教授の
竹村 令先生と云い、高橋典子嬢は卒業してから、先生の邸宅の隣の二階家に一人で
住んでいたのである。驚くべき事に家同士が廊下で繋がっていて行き来自由であった。
高橋典子嬢は新潟県出身で、にこやかに、おおらかに発声法を教えてくれた。＜腰を
しっかり据えてから、頭の天辺に声を持って行く。腰と頭との距離が意識的に大きけ
れば大きいほど良い。＞と云うのが高橋典子嬢の発声技術の根幹であった。次第に私
の声にヴォリュームと輝きが増して来た。1、2ヶ月した頃「戸賀崎さんはFAUREな
んか歌えますよ。RAVELの『ドン・キホーテ』なんかもいいんじゃないですか。」・・・
私が小さな声で「いやぁ・・・」と言うと、高橋典子嬢は「本当ですよ。」とにこやか
な誠実さが感じられる表情で答えた。発声法の他にピアノも勧められて、ピアノ教則
本のバイエルを並行して彼女から習うことになった。歌は、手始めにGOUNODの『夕べ』
だったと記憶している。今思えば不思議な事に、偶然出会った竹村 令先生がフラン
ス歌曲の専門家だという事を私は全く知らなかったのである。その門下生の一人から
幸運にも私はフランス歌曲なるものを習い始めたのである。数ヶ月が過ぎた頃、高橋
典子嬢は私に竹村 令先生からも月に一度、直接習う事を提案したのである。・・・初
めて竹村 令先生からレッスンを受けた様子が蘇る・・・先生は私の傍に立ち、早口
の京都弁で、「あなた、歯磨きのチューブはどこを押せば良く出ると思う？」「・・・

真ん中ですかねえ。」「違う!」「・・・一番下ですか?」「そうよ! お腹^{なか}触ってご覧!」私はとっさに目の前に立っていた先生の下腹^{したばら}に手を当ててしまったのである。「違うわよ! 自分の!!」ぐにやっとした感触を一瞬味わってから私は自分の迂闊^{うかつ}さに気付いたが、こちらも驚いて詫びの言葉が出ない内にレッスンが続けられたのであった。・・・それから5, 6年後1982年に「日仏歌曲研究所」が竹村^{のり}令先生を中心として発足したのである。故滝沢三重子先生, 故河本喜介^{よしすけ}先生, 故稲垣泰子先生らの教授陣に加え, フランスから世界的なGénard SOUZAY^{ジェラル スーゼー}氏等も竹村邸に招き公開レッスンが催され, 私も第一期生としてGénard SOUZAY^{ジェラル スーゼー}氏の指導^{もと}の下, 2, 30名の音楽関係の方々が見守る前でGOUNOD^{グノー}の『谷』《Le VALLON^{ル ヴァロン}》を独唱したのである。

(2008.11.28 記)

French and French Songs throughout My Teaching Life

Hiroyasu TOGASAKI

Before I mentioned my career of the French language and that of the French songs, I will begin to refer the surroundings of my childhood and my youth.

I believe the expressions of the songs and also the method of teaching French are influenced by the character and the life style of the person.

It was at the age of eighteen in 1959 that I began to study French at my Alma Mater Rikkyo University and it was as a junior in 1962 that I sang for the first time in its Glee Club a French work: "The four prayer songs in ASSISI", composed by Francis POULENC. It was however not in French, but in Japanese that we interpreted them.

After having graduated its Department of Economics in 1963, I entered the third year of the French Literature department, which was inaugurated in this university. I eagerly made an effort in this new language, while I began to take a private lesson of "The bel canto" method of vocalization under Mr. Shoichi NOBUYASU's guidance. Then I continued to study French literature in the master's program. In 1969 I had an opportunity to go to France to regularly attend several classes in the Institute of Foreign Students, annexed to the Literature department of the University of Montpellier, located in the southern part of France where I stayed for two years.

Returning to Tokyo in 1971, I became a part-time professor of French in several universities. I began again to study the vocalization while taking private lessons of Italian and French classical songs under the guidance of professional singers, first from Miss Michiko TAKAHASHI and then Mr. Takamichi SHIOZAWA. As soon as «Le CERCLE de Deux COLONNES» ("The CIRCLE of Two PILLARS") was organized by Professor Nori TAKEMURA with three regular professors coaching French and Japanese classical songs at her residence in SETAGAYA, in 1982, I had an opportunity to receive guidance from the late Prof. Yasuko INAGAKI, the late Mr. Yoshisuke KAWAMOTO, the late Prof. Mieko TAKIZAWA and also Professor Nori TAKEMURA who invited once a week various lecturers such as a film director, an actor, a critic on paintings, a critic on Japanese dishes etc. To my great surprise Professor Nori TAKEMURA invited a world-famous singer Gérard

戸賀崎博保

SOUZAY who commented directly each Japanese singers' performance concerning French works in front of about thirty experts in attendance.

Among ten singers I performed *«Le Vallon»* ("The Valley") by Charles GOUNOD.